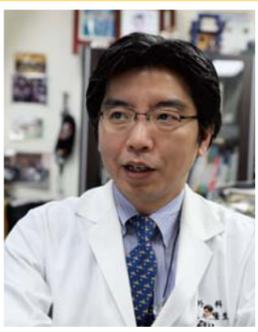


# 医師の本棚

— 先輩医師が選ぶ良書 —

## 大木隆生先生が選ぶ5冊



東京慈恵会医科大学外科学講座 統括責任者  
米アルバートアインシュタイン医大 血管外科教授

### 大木隆生先生

1987年、東京慈恵会医科大学卒。1993年、東京慈恵会医科大学大学院修了。米国アルバートアインシュタイン医科大学血管外科研究員、同大学病院血管内治療科部長、同大学血管外科部長を経て、2005年、同大学外科学教授、2006年、東京慈恵医科大学血管外科学教授、2007年東京慈恵医科大学外科学講座統括責任者



ブラック・ジャック  
手塚治虫 ( )

まず、間違いなく外せないのはブラック・ジャック。ありきたりですが、やはり原点ですね。小学校高学年から中学校あたりにかけて読み、技術でもって人命を救うという目標を指すようになりまし。もともと凝り性だったこともありですが、外科というのは、技術の低い低いよって結果が違うので、非常に追求しがいがあると感じました。ブラック・ジャックに憧れて、僕もこういう世界で技術を磨いて、他では治せないといわれた人たちを治してみたいと思、今で



白い巨塔  
山崎豊子 (新潮文庫)

この小説にもやはり、財前五郎という非常に優秀な外科医が登場します。彼は食道がんの名医で、どこに行っても直せないといわれていた患者が次々彼の元にきて、ブラック・ジャックのように治していく。一方で、医学部の中で必死に登りつめていく、壮絶な闘い、醜い部分が描かれています。

僕は父親は大企業の重役、祖父は政治家、いとも政治家、おじは四国」の会社の経営、もうひとりのおじも高知県の県議会議員をやっている、いわば「華麗なる一族」なんです。そういう中であって、僕は一族の中でただ一人の医者になりました。医者はどんなに逆立ちしても、地位、権力、社会的影響力、そういったもので政治家や大手企業の重役には絶対になんないことを知っていたので、僕は、医者として出世する、教授になるという事は非常にむなしと感じていました。この本は中学生の頃に読んで、外科医・財前には非常に憧れましたが、教授・財前には猛烈に反感を覚えました。僕は医者になっても絶対に地位は追求しないと決め、その代わり、ひたすら医療技術を身につけ、手術や医療器具の開発に没頭してきました。外科医としての財前五郎やブラック・ジャックのようになって、とにかく多くの人の命を救う医者になる。それこそが、祖父や父がなしえなかったことだと思、いち外科医としてここまで邁進してきました。みんなが無駄だと笑うような研究もやっ

きました。偉くなりたいと思うと確実に結果に結びつくような研究、論文になるような研究しかやらなくなる。アインシュタインの言葉で「If at first the idea is not absurd, it is not worth pursuing.」そのアイデアが見ればかばかしいものでなかったら、それを追求する価値はない」というのがありますが、皆が「それはいいアイデアだね」、というようなものなら、もうそれは当たり前のごとで、追求する価値はない。でも僕は、周りから「そんな無駄」と言われても、ひたすら好奇心で研究を重ねてきました。だからこそ、ホームランを打つことができたんだと思います。



釣りキチ三平  
矢口高雄 (講談社)

とにかく僕は子どもの頃から猛烈なフィッシングマンでした。この漫画では、天才釣師の三平が、独特な釣法を開発して、魚がいそうな場所を探し当てて、天性の勘で数々の大会で優勝して…。僕は、三平のように、なにかを追求して、技術を高める、それが好きだった。技術がきちと結果に反映する。そういうも

の性に合っていたんです。もともと生まれたのが高知で、三歳くらいまでは親元ではなく高知の祖父の下で育ちました。その後、東京の両親のところに戻りましたが、それから毎年年夏になると祖父が僕と兄の航空券を送ってくれて、高知に帰っていました。東京で三年暮らした後は、父の仕事の関係でロンドン、パリ、ブリュッセルと7年間ヨーロッパにいましたが、そのときも、夏になると必ず祖父が高知までの航空券を送ってきて、1ドル360円の時代に、小学生二人で飛行機を乗り継いで高知まで帰っていました。祖父の家の裏には仁淀川というすい清流があつて、そこで朝から晩まで夢中になつて釣りをして過ごしていました。そんなときにこの「釣りキチ三平」を読むようになって、熱中してアイデアを真似たりしました。自分でもルアーを作って、それを使って子ども釣り大会とかで賞を総なめにしています。そのとき創意工夫して、趣向をこらして道具を作った経験、発想が、新しい医療器具、新しい手術の開発をするときの原点にもなつていて、今につながっています。しかし、三平は漫画の中で常に結果を残していました。実際、釣りはどんなに工夫を凝らしても、結果に結びつきにくい。運が大きいので、自分の手ほどきではじめて釣りをした友達がいきなり大物を獲ってしまったら…。そういう点で虚しさはありません。



日本改造計画  
小沢一郎 (講談社)

幼少時代をヨーロッパで7年間過ごして帰国したとき、「日本ってなんて変な国なんだろう」と感じました。みんないっせいに横並びで、実力主義ではなくて、法律やルールでがんじがらめ。日本の中学校では、授業中に質問もできない、ディスカッションもない、ひたすら一方通行。それに対して違和感を持っていました。この本には、「日本がいかにいびつな国で、いかに遅れているか、だから西洋並みの国にしよう。国が何から何まで国民の面倒をみるんじゃないかって、もっと自由を与えて、その代わり自分で責任を負う。そういう国にしようじゃないか」と書かれていて、それを読んだとき「わが意を得たり」と。中学生の僕が日本って変だよなと思つていたところを見事に書いていて、そのときから、僕は小沢一郎のファンです。小沢一郎という、志の高い、日本を本気で良くしようとしている人が、その過程で少々法に抵触することをやつていても、僕は容認してあげたい。法律を守るのが政治家の役割ではなく、日本をいい国に導く志の高い人が政治家をやるべきです。今回の政治資金

の件も、彼は円も個人的には流用していない。全て政治塾、将来政治家を目指している貧しい若者たちのため、あとは自分の派閥の応援資金に使っている。そういうのはルールに抵触して、自分が私腹を肥やす悪ではないし、大きな志、ビジョンを達成する手段でしょう。日本の国民やマスコミはそういうのにアレルギー反応を示しているけど、僕の場合は嫌いなには違和感がありますね。



男たちへ  
塩野七生 (文春文庫)

著者の鋭い感性と洞察力で、男と女の価値観、人生観の違いが深く、広い事を数々のエピソードや事例をとおして見事に描写しています。また、こうしたボタンの掛け違いによる影響が社会の隅々まで浸透して、いかに現代社会が男性の独善的な価値観で形成され、営まれていくかが理解できます。女性医師が医学部卒業生の4割に達している現在、女性医師を無視した病院経営はなりたない状況となつているので、女性医師とのかかわりがある全ての男性医師にとって必読の書といえます。

